

第2回 生田緑地ビジョン推進会議（令和4年12月23日）

議事概要と論点整理

1. 生田緑地の危機的状況について

- ・ ナラ枯れの蔓延により生田緑地の緑は危機的な状況にある。枯木の倒木などによる被害を防ぐため対策を早急に進める必要がある。（倉本委員）
- ・ ナラ枯れの再発を防ぐには雑木林を若返らせる必要がある。生田緑地の目標とする自然のあり方や土地利用計画を見直すべき。（倉本委員）

2. 「ワイズユース※」について

- ※ワイズユース：自然から得られる恩恵を受けつつ、その豊かな生態系を子孫に伝えられるように、守りながら利用していくこと。
- ・ 保全と利用の関係を個別にとらえるのではなく、一体的にとらえる必要がある。ワイズユースの考え方をもとに、生田緑地ビジョンの基本的な考え方の見直しを図るべき。（倉本委員）

3. 「キャリングキャパシティ※」について

- ※キャリングキャパシティ：森林や土地などに人手が加わってもその生態系が安定した状態で継続できる人間活動の上限。
- ・ 生田緑地は川崎市の重要な資源であり、魅力的なコンテンツであり、まちづくりの拠点であるということにはコンセンサスが得られているが、それぞれが感じている価値については衝突し合うこともあると思う。それを調整するためのルールづくりが、生田緑地ビジョン改定の重要な部分になる。生田緑地の自然や文化財の活用とその価値の保存のバランスをどうとっていくのか、キャリングキャパシティについてのコンセンサスを得るための仕組みづくりが重要。（垣内委員）

4. 市民への情報周知の必要性について

- ・ 雑木林を若返らせるなどのために必要なコストに対して市民の理解を得るためには、生田緑地が持つ特別な価値を川崎市民に伝える必要がある。（倉本委員）
- ・ 生田緑地の緑のあり方、地形の特色、ナラ枯れなどの課題といった実情を市民に伝えきれていない。（薬袋委員）
- ・ 生田緑地の自然の特別な価値と危機的状況が市民に理解できるような資料をつくってほしい。（金子委員）

5. 「市民科学※」について

- ※市民科学：職業的な科学者ではない一般市民が科学研究に関わること。
- ・ 生田緑地の生態系や環境に関わる多様な情報を共有するため、GISなど現代的な技術を活用したプラットフォームをつくることは新たな取組として期待される。市民科学を活用し、地理情報の上に生物や利用者の情報を載せ、それらをかけ合わせた管理につなげられるとよい。（薬袋委員）

6. 市民目線で考える、発信することの重要性について

- ・ わかりやすい、乗りやすい、思わず生田緑地に気持ちが向く、応援したい、などと市民に感じさせる、そういった視点を意識して生田緑地ビジョンの改定を考えていくべき。（橘委員）
- ・ 市民の注目を集めるには、生田緑地を生活にどのように活用できるのか、生活とどのように関わっているのかを、市民目線で明確に示すことが必要。（金子委員）

7. 「稼ぐ」仕組みについて

- ・ 里山における人と自然のかかわりを取り戻すため、自然から得られる恩恵を元手に「稼ぐ」仕組みが必要。雑木林の若返りを担うボランティアが参加意欲を高められ、面白さを感じられる、未来につながる「稼ぎ方」をめざすべき。（倉本委員）
- ・ 里山から得られる利益を使って指導的立場を担う適切な人材を雇用できるとよい。（倉本委員）
- ・ 里山で稼ぐ仕組みをつくるためには、ボランティアだけでなく、民間企業などの力を借りることも検討するべき。民間企業の新たな関わり方があるのではないか。（薬袋委員）
- ・ 「稼げる」とは安定的に運営できるということ。生田緑地に関心のある人、直接関わる人、生田緑地を仕事場にする人、生田緑地を自分ごとを感じる人を増やしていくには、入口を増やすことと、関わり方を変えていくことが大事になる。（橘委員）
- ・ 生田緑地の管理費用についての現状を示す資料をつくってほしい。（金子委員）
- ・ 自然から得られる恩恵は文化施設と同じで、収入支出の面では稼げていなくとも、お金に換算できない存在効用がある。市民にはそのことを理解してほしいと思う。（薬袋委員）
- ・ 将来世代のために遺しておきたい、地域の魅力を高めるなど、マーケットから直接回収できない価値が自然や文化施設にはある。（垣内委員）
- ・ 川崎市藤子・F・不二雄ミュージアムはコロナ禍の影響で苦戦しているが、今後もインバウンド集客が期待でき、川崎市が誇る鉄板コンテンツといえる。文化観光に訪れる国内外からの観光客が地域の消費を回していく可能性もあるため、波及効果も含め中長期的な視点で考えてほしい。（垣内委員）

8. 関連計画との連携について

- ・ 生田緑地ビジョンの改定に当り、関連計画との連携をどのように表現していくかが課題となる。（薬袋委員）
- ・ ビジョン策定後、関連計画を担う主体とどのように連携していくかが重要となるため、ビジョンの改定を考える過程においても、各計画主体と話し合いの場を持つなどの下ごしらえができるとよい。（薬袋委員）

9. 防災について

- ・ 生田緑地が持つ災害リスクと防災機能を市民が理解する防災教育が必要。そのうえで避難場所としてどうあるべきかを考えてほしい。（薬袋委員）
- ・ 保水力などの防災機能、グリーンインフラとしては、周辺農地や多摩川と連携する視点が不足しており、周辺農地の減少も課題となる。（薬袋委員）